法政大学学術機関リポジトリ

HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-01-15

詩人黄瀛の光栄一書簡性と多言語性一

岡村, 民夫

```
(出版者 / Publisher)
法政大学言語・文化センター
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
言語と文化 / 言語と文化
(巻 / Volume)
6
(開始ページ / Start Page)
(1)
(終了ページ / End Page)
(27)
(発行年 / Year)
2009-01-31
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003623
```

226

(1)

詩人黄瀛の光栄

—— 書簡性と多言語性 -

村 民 夫

岡

幼時、父を喪ひて以来、北平、天津、青島、東京等各所に転々す。一九○六年一○月四日 四川省重慶市に生る。

伝書鳩の権威

かつて、中隊長、参謀本部部員、現在、軍政部特殊通信教導隊長。背島日本中学校を経て、文化学院に学び、後、陸軍士官学校卒業。

たためた自伝であり、半ば作品的価値がある。 文である。つまり「僕を全く知らないで此の詩集を手にする人へ、敬意を表するために」(同書「後記」)詩人がし 以上は、 黄瀛の第二詩集『瑞枝』(一九三四)の巻頭に、軍服姿の「著者近影」とともに掲げられた「小伝」全語がで

母 学校に入学してから本格的に学び、準母語となった。中等教育は、東京の正則中学校と青島日本中学校で受けた。 ?・太田喜智とのあいだに生まれた、中国国籍の長男である。日本語は一九一四年に千葉県の八日市場尋常高等小 伝記的観点から補足すれば、 彼は、 重慶の川東師範学校初代校長だった中国人の父・黄沢と、日本人交換教員の る鳩についてコメントする

いる。

(2) ある朝ある姿」のなかで、黄瀛は「吉林の友人へやるはがきを書きをへる」自身の姿を描いたのち、

二十期中華民国留学生十五名の一人として入学した。一九二九年七月に士官学校を卒業すると、中野電信隊中隊長 離れ、東京の文化学院に入学するが、一年ほどで自主退学し、一九二七年十月、市ヶ谷台の陸軍士官学校本科へ第 「日本詩人」に投稿した作品により新詩人第一席の栄誉を受け、詩人黄瀛は一躍脚光を浴びた。一九二六年、 遊した中国文学者・奥野信太郎は、南京から東京へ種鳩の購入にやってきた教え子との再会を回想し、こう述べて 本語で口語自由詩を書きはじめたのは正則中学校時代、十六歳頃という。一九二五年十八歳にして、詩壇の登竜門 を考えるうえでとても示唆にとんでいよう。文化学院で黄瀛を教え、以後互いの家を訪問しあうほど親密に黄と交 「小伝」が「参謀本部部員」「軍政部特殊通信教導隊長」と暈して表現しているのは、国民党陸軍のそれなのだ。 に配属された。北伐を敢行する蒋介石に共鳴し、満州事変直前の一九三一年初頭、中華民国新首都・南京へ渡った。 黄瀛は日本陸軍でも国民党陸軍でも通信に関わり、とくに軍用伝書鳩の登育係を務めた。この逸話は、 彼の文学 背島を

たといふそのこと自身が、すでに幾何かの詩情を湛へて、人の心に訴へるものあらしめる。況んや黄を知る者 十分なのである。南京から詩を愛する中国の青年将校が、遥々東京まで鳩を購求する役目を自ら買って出てき 出して笑つたのであつた。 昂然と、自分はいまでは中国に於ける軍用鳩の権威であると言い放ち、もつとも自分一人だから当然だと声に その頃から彼の胸裡には、やさしい鳩が巣籠つてゐたことであつたらしいのだ。彼はわたくしの問 が直接黄の口からその話を聞くことに於てをや。わたくしをして甚だしく愉快ならしめたのは勿論であつた。 鳩の権威か、それに非ざるかは問題ではない。ただ黄瀛が鳩を撫するといふだけで いに対して

(奥野信太郎「詩人黄瀛のこと」) 飼ってい

ルの「信天翁」を思わせなくもない)。

九二三年、青島日本中学校の黄瀛が、「詩聖」誌上で知った草野心平へ「いったいあなたは中国人なのでしょ

224

午前一回の運動飛翔をする当歳の鳩群は雲に隠れたそれはあるひは雀の鳴き声かも知れないオレは唯耳かたむけてゐる動かない天から鳩の羽毛がちら〳〵おちてくる動

オレの鳩車では二十羽のあいつがのどをならしてゐるだらう(中略)

動く姿勢を示すために立つとなりの電信隊の物音をふりはらふオレは冬のひやりとする風を感じてはゐないオレは? オレの標語を思ひ出さう 鳩は平和のシンボル、雄々しき武装者!

オレは回転椅子に身をくるりとひるがへす。

作業服を身につけて、オレの鳩車へ─→

(軍用鳩調査委員事務所にて)

眼がよわつて/旅先でもろくも墜落惨死する/実に可愛さうな鳥」が、「詩的な鳥」と讃えられている(ボードレー を通して、船に随行する対馬生まれの鴎、大連の「一晩中あの煙の空、透明な空を飛びまはり/しまひには羽根や モチーフは、詩「鴎」にも見いだされる。そこでは日本から大連の港へ向け「支那海」を航海する船の水夫長の口 これは、黄が自分は伝書鳩に似ていると自覚していたことを示す一種の換喩であるといえる。伝書鳩に類似した (3)

(4)

越えることの達人、一流の媒介者だったのだ。 治を訪ねることで、 よって、岩手県花巻の宮沢賢治は「銅鑼」同人となった。そして黄は、一九二九年、花巻の実家で病床にあった賢 東京で髙村光太郎の彫刻のモデルをしていた黄は草野を彼に紹介した。 うか日本人なのでしょうか」とたずねる手紙を出したことをきっかけに、二年後「銅鑼」は生まれた。 草野と野治の関係をさらに強めた。淋しがりやで社交家で筆まめな混血詩人は、 同年、 草野と黄の連名による勧誘の手紙に 諸々の境界を

海 時の中国詩の日本語訳を、 の魯迅に賢治の童話を紹介した。大陸の文人たちと間接・直接の豊かな交通がなければ、 黄の媒介者性は、 日本語と中国語の境界をめぐっても確認できる。日本語と中国語の二言語を併用する彼は、 「銅鑼」「詩神」「若草」「詩と詩論」「改造評論」といった日本の文芸誌に掲載 なせることではあるま 当

獄中生活や労役に服す。出獄したのも束の間、文化大革命により一九六六年再度逮捕され、 ところが、蒋介石が台湾に敗走した一九四九年、黄瀛は共産党軍に投降し捕虜となり、一九六二年までの十三年間 党少将としては、 本語との黙契を再確認し、日本語を〈友愛の言語〉として創りなおす試みを意味したはずである。 贈る習いがあったらしい。 ている。つまり、彼にとって、詩を書くとは、意識するとしないとにかかわらず事実として、そのつど自己と日 ネットワークを積極的に広げ、 詩作においても彼の媒介者性は顕著に認められる。彼は日本語で詩を発表することを通して、 日中戦争のあいだ筆を折っていた黄嬴は、 何応欣秘書を務めつつ、中国に抑留されていた草野心平や山口淑子(李香蘭)の帰日に尽力した。 詩作と交友の分ちがたさ ―― それが日本語の選択や習熟というファクターと深く結びつ 温めていった。 日本の敗戦後、再び日本の文芸誌に詩や随筆を送るようになり、 書簡とは贈与の一種だが、黄瀛には、折に触れて友人に即興詩を 十一年半入獄する。 日本の詩人たちと 国民

日本語・日本文学の教師の地位を得、 文化大革命の終焉と開放政策により、ようやく黄瀛は一九七八年七十二歳に至って出獄すると、 日本の旧友たちへ繁く手紙を書くようになった。一九八二年、『瑞枝』 四川外語学院 が復

境を身上とする詩人がかくも長きにわたって翼をもがれたとは、

悲劇というほ

かない。

(5) であるという日本文学の弱点ばかりか、私たちの日本語への愛の薄弱さを静かに告げていよう。 てはならない。黄瀛の希有の詩業を正面から論じた論文は、皆無に等しい。この沈黙は、身近な他者の存在に鈍感 八歳で亡くなると、二日後「朝日新聞」は訃報を掲載した。しかし、再評価はまだ端緒に着いたばかりといわなく 竜一による評伝 刻された。一九八四年以降、 『黄瀛 その詩と数奇な生涯』が上梓された。二〇〇五年七月三十日、彼が生まれ故郷重慶で九十 彼は五度、再来日する。黄瀛の存在が再び日本人の耳目を集め、一九九四年には佐藤

日付のある窓

厚である。読者の心を和らげられた上、それ以上の何ものかを、感銘さしてゆく彼の詩の秘密は、蓋しその私信の さい可愛い詩集」(「詩集『景星』後書」)と、一九三四年にボン書店から出版された豪華な箱入り製本の『瑞枝』。 必要とする。公開状は対者を必要としない。彼の詩は、たとへ未知の人が読んでも、自分だけに送られた感じが澱 逆に彼の詩はしばしば好朋友へのなつかしい書翰でもある。決して公開状ではない。 するということである。奥野信太郎はそれを的確に指摘している ――「彼の書翰がしばしば詩であるが如く、 体の序詩を冠する。出版に至るまでに、海を越える鴎さながらの手紙のやりとりが、さぞやあったことだろう。 しかも、髙村光太郎の「序」と、木下杢太郎の「詩集「瑞枝」の序に代へて「作者黄瀛君に呈する詩」という書簡 規模で複雑な友愛の交換があったと思われる。黄の「後記」によれば、『瑞枝』は、彼が中国に発ったのち、日本の トしたという女性だ(黄には上野動物園に取材した動物詩の連作がある)。『瑞枝』の出版をめぐっては、さらに大 いずれも文化学院出身の吉田雅子の装丁による。文化学院生時代、盛んに黄がラブレターを送り、上野動物園でデー 「多くの友人の労を煩はし」て成った詩集であり、近作のほか、「多くの友人の希望」によって旧作を収録している。 そして私がここで特に強調しておきたいのは、友愛や親愛の手紙に通ずるものが、黄の個々の詩篇の核心に存在 黄瀛が生前に世に問うた詩集はわずかに二冊、一九三○年に限定百部で自費出版した「小さい可愛い詩」の「小 /書信は必ず個 人的な対者を

(6)

り」(「氷雨の夜 Nocturne No.4」)。

《しさに潜んでゐる」(「詩人黄瀛のこと」)。

自身が書く手紙や、

(2) 「マカオ小景」等)。 や肉親からの手紙への言及がたびたび登場するという事実を指摘できる(「短章」「朝のよろこび」「ある朝ある姿」 「狂暴なる伊想」「夜明けのバラ~~雨」「ベットの中で」「十四号のサノリへ送る詩」「妹への手紙⑴」「妹への手紙 私たちは奥野の実感を分析的に捉えなおしてみよう。まず、筆まめな詩人の詩のなかに、

人間だけでなく、自然にも及ぶ ――「梢さん、梢さん/雪でも降りさうな天から/またもやつて来たね、 か他人らしくなりさうだが/そんなことはゆるしてくれるだらうね」 (「妹への手紙(1) 」)親しげな呼びかけ口調は、 暮らす妹・黄寧声へこんなふうに報告する ――「移つたところが遠いので/お前のところへ上げるたよりも/何だ を指摘することができる。例えば、詩人は東京市中から「日本東京市外和田掘町和泉二四三」への転居を、 第二に、「君」や「あなた」「お前」等の二人称、つまり親密な二人称の多用や、命令形や呼びかける口調 氷雨の光 天津に の頻 用

日時、 であることを暗示している。日付の裏には、歴史に翻弄されるおのれの人生の予感がある。 異性の指標となるとともに、同時にそれが大きな現代史、とりわけ日中の政治関係にじかに隣接したはかないもの 陸軍士官学校留学生となってまもない二十一歳の詩人は、「天と地とが刻々に迫られてゐる、 宛先、署名、日付といった類いの記号も黄瀛詩に欠けていない。年号(西暦であるという特徴がある)、 地名、人名などが頻出するのだ。これら書簡的記号、ことに日付や時刻は、 自習室の南面の窓の白いカーテンの影から暗い市ヶ谷の夜景を眺めている。 人間関係や出来事の親密さや特 十二月の寒さ」を 月日、

やつは過ぎ去つた遥か市街を越えて あゝもうとつぷり暮れた一九二七年の日本

梢さん、梢さん

思念がやがてあやしい宝石のやうに光るのを

私はその後に来る寒さを待つてゐる

これからまた赤と背との戦争ごつこの私の仕事を初める前にこの寒さがあなたにもめぐることを考へくるクリスマスの暖い夜を考へ身に迫る烈しさといろ~~安らかさといろ~~

(「氷雨の夜 Nocturne No.4」)

れているせいで、かえって親密なトーンを強める。 と国民党の背天白日旗を意識した表現だろうか。「あなた」への呼びかけは、個人を越えた歴史の荒波に取り囲ま とともに、「戦争ごつこ」が身に迫っていることを感受している。「赤と青との戦争ごつこ」は、中国共産党の赤旗 が、恋する女性だろうか。自習室の窓は寒風から詩人を保護しているが、詩人は外部の氷雨の移動や、寒気の接近 「やつ」と呼ばれているのは、いましがたまで降っていた氷雨。「あなた」と呼ばれているのは、はっきりしない

う日付は、何かが去り、別の何かがまだ来ないという危うい静寂、一時的均衡、 府に対し蒋介石がクーデター(白色テロ)を企て、国共の関係も悪化していた。「一九二七年」や「十二月」とい 第一次南京事件(南京暴動)が起き、五月には第一次山東出兵に至る。また四月には、共産党による上海の臨時政 兵と、済南事件(山東省省都・済南の日本人十二名が蒋介石の命によって処刑されたことに対し、日本軍がこの省 結びついているのだ。実際、翌一九二八年に入ると、日中関係をさらに悪化させる大事件が起きる。第二次山東出 日中関係が悪化している。一九二七年三月には北伐軍の南京入城に際し、日米英等列強の在南京民が襲撃された つかのまの休息、過渡的な滞在と

都を制圧した事件)である。

山東省における日中の武力衝突が、

青島で中学時代を送った黄瀛にとって、とりわけ

心を苛む出来事であったことは想像に難くない。

(8)

の耳は る。季節の知らせは、 巨大な外部の響き(風雨、 や歴史に無関係な私的叙情と見なすとすれば、その魅力や価値の半分を捉えそこねることになる。室内の詩人は、 省しながら手紙的な詩を書く。それらは奥野信太郎のいうとおり、「公開状」的なものではない。私淑した高村光 太郎や親友の草野心平の詩と異なり、述志の詩、主張したり告発したりする詩ではない。けれども、 外部を絵画か影絵のような映像に変え、壁や天井は記憶を投影するスクリーンとなり、詩人は静かな室内で独り内 本学校寄宿舎の窓を磨きながら青島の街を眺めている)をはじめ、多くの詩が室内を舞台や視点としている。 ポスである。 「日本詩人」一九二五年二月号で「新詩人第一席」の栄誉に輝いた出世作「朝の展望」(詩人は青島日 黄癜は「各所に転々す」才能に恵まれているものの、行動の詩人ではない。室内はこの詩人にとって特権的なト 〈時〉を聴く。 自然の永遠の反復よりも、歴史とそれにともなう自己の身分の変転と結びついている。詩人 雷鳴、鳥や犬の声、足音、喇叭、夜汽車、汽笛、都市の騒音……)に聞き耳を立ててい 彼の詩を政治 窓は

一九三〇年の寒い風の窓消えて行つたやうな友人を呼ばうかしらぶる~~ふるへる犬のやうな胴ぶるひ

カアテンをしぼれば小さな世界重量を忘れてしよんぼりしてるオレ

冴えた眼で悲しい影絵を見乍ら泣きつ面をする今まで考へなかつた事で虚空をつかむ

つくねんとした灯にぽつちり暖かい気もちを所有する

立けない立きつ面を一泣ければいゝのに

泣けない泣きつ面をしてる

たどる日中関係をめぐり「泣けない泣きつ面」をしていたと推量できる。つまり彼がふるえているのは、東アジア 詩集『景星』を出版しており、まもなく国民党の新都南京へ旅立つことになる青年は、中国の激動と悪化の一途を の歴史の寒さなのだ。「一九三〇年の寒い風の窓」とは、詩の生成する小さな内部空間を画すると同時に、それを 九三〇年末、中野電信隊時代、またしても詩人は窓辺に佇んでいる。明示されてはいないが、数ヶ月前に第一

眠られぬ夜の感情を、時々刻々と記した詩であることがわかる。その第六連 寝室」等の語から、一九二七年十一月二十三日(昭和に改元されてから最初の新皆祭)の士官学校寄宿舎における、 『瑞枝』においてこの詩の直前に置かれた「新甞祭の夜(Nocturne No.3」は、タイトルや「格納庫」「この第七

歴史へ接続する文学的分節装置である。

— 十時二十五分過ぎ

安らかに死んでしまへ!

僕はまだ眼をつぶり乍ら眠れないんだから情けない!夜は寒さで寝室の白亜の天井が悲しいフイルム

いや、それよりも死にたい、このかなしい世界から僕は歴史を考へてる、僕自身の今日一日の日誌を

歴史」は「僕自身の今日一日の日誌」に還元されているが、それでもやはりそれは「歴史」であって、「このか

(「窓を打つ氷雨」)

(10)

しかも、日本的なものに対して、

西洋的なものや中国的なものがエキゾチックなだけではない。

日本人の視点と

なしい世界」の全体から切り離すことができない。 「新嘗祭の夜」というタイトルからも明らかである。 詩人の孤独な不眠の夜が、大きな歴史に関係していることは、

三 アヒノコの吃音

頼漢兵士」……。 クリームやソーダ水」「電影」「白河川岸「フランス花園」「白いプリンソーダ」「朝鮮の美しい女」「アメリカの無 鳥」「督辯公館」……。 例えば、青島を「伊太利のやうなこの町」と形容する「朝の展望」における「ミツシヨンスクール」「胡藤」「朝鮮 黄瀛はこの種の都市風景を扱った詩のなかに、エキゾチックな風物ないし語彙をキラ星のごとくちりばめている。 租借地の風景、 風景に関して黄癜的なものはなにか。横浜、 すなわち様々な国民や様々な文化が共存し混合した国際的都市の風景である、という答えになろう。 あるいは天津の日本租界を回想した「喫茶店金水 —— 天津回想詩 ——」における「アイス 神戸、青島、天津、上海、 大連、マカオといった港湾や租界ないし

と見てさしつかえあるまい。 だろう。いずれにせよ、こうしたモダンで明るく爽やかなエキゾチシズムこそ、 立ちもとらふのを、 生活以外に、『瑞枝』「小伝」に銘記されているように黄が幼い頃から中国国内を転々としていたことも重要な与件 んだ少年の日のそれであつたことに帰属せしめてゐる。彼の第一詩集『景星』を繙く者は、中国といふ古い大陸 ることを看取しては、それが背島生活の彼に与えた此上もない強い影響であり、殊にその生活が、最も感受性に富 角に鏤められた一つの宝石にも比すべき、ヨオロツパ風の都会青島を極く身近かに感じて、その植民地的香気の 「わたくしは彼の詩に、青島の海のいろと空の光とが明るい大きな花びらのやうに、いつも楽しく揺れ動 新鮮なレモンの匂ひのやうに思ひなすことであらう」(奥野信太郎「詩人黄瀛のこと」)。 黄の詩が早くから好評を得た要因 Li. てる

216

うした風景の底に悲哀を感じとっていたことは、しっかり押さえておく必要がある。背島をあとにした十九歳の黄 多文化的な都市こそ、混血児黄瀛の身体にいちばんしっくりなじむ環境であったはずである。もちろん、彼がそ

中国人の視点を兼備する黄においては、日本的なものもエキゾチシズムの構成要素となる。日本語で詩が書かれて を引けば十分だろう。黄がしばしばひらがなやカタカナを過剰に用いて日本語を表記しているのは、意味に還元さ いようともそうであること、日本語がコスモポリスという環境で放つ新鮮な香りを確認するには、次のような詩行

少ししめつた道路は春の土色だ寒い風も吹かないし

れえぬ語音を強調するためといえよう

日本租界の方へ行つたら

僕は自転車のケツに妹をのつけて

春が来たなんて日本の子供がうたつてたつけ

あいつの背中はこつちへひるがへるアメガフリマスニホンへアサツテカヘリマスハタ……タコ……コマ……ハトあいつの背中はたくましい馬だ

(「早春」)

(「あいつの背中へ書いた詩」)

は

降り立った神戸港で見かけた混血の少女をこう歌っている

(12)

白いパラソルのかげから

私は美しい神戸のアヒノコを見た

すつきりした姿で

涙ぐましい処女を見た

何だか露にぬれた百合の花のように

父が —

母が

その中に生まれた美しいアヒノコの娘

そのアヒノコの美しさがかなしかつた

(「七月の情熱」)

訣別を暗示的に宣言しながらも、自己の悩ましい出自を光輝ある歴史的運命として受け入れ、主張しようとしてい 光線で見透かされたオレのみすぼらしさは?/―― いや、いや、歴史は光輝ある名誉/古めかしい匂ひのまゝでいゝ」 (「われらの Souvenirs」)。士官学校卒業を控えた一九二九年五月の作と思われ、過去の人間関係からのある種 たと思われる ――「これはこゝでおしまひになるものだと自覚する/オレの出発はこゝから始まる/それならばX ノコ」は美しく、「七月の情熱」をかき立てる。文化的混合に官能的なポエジーを感じるのが黄なのだ。 けれども、文化的混交や混在が、望ましからぬ混乱や侵略として告発されているわけではない。彼にとって「アヒ また、黄は自らの混血性に悩みながらも、根底ではそれをかけがえのないアイデンティティーとして肯定してい 混血の少女に対して彼が感じた「かなしさ」が、混血児としての彼の自覚や経験からくることは明らかである。

ると解釈できる。

校に在籍している詩人がいう国は、日本だろう。詩人は中国を憂う発言を嘲笑する日本の芸術家に腹を立てている というときの国とは、「こゝの国」と対比されており、中国のことだろう。そして「こゝの」と日本の陸軍士官学 う詩行が記されている。この「国」とはどこの国か。同じ詩のなかに出てくる「この国の陸軍始の観兵式」の の国」は明らかに日本を指している。しかし、「私達の」と黄寧声を含めていうときの国や、「国を思ふと腹が立つ」 にふるへてる私達の国/『国を思ふと腹が立つ』/この言葉にこゝの国の芸術家は不健康な嘲笑をするのだ!」とい しようとするのではなく、あくまで国境上に身を持そうとする自己を確認している。 一九二八年一月に書かれたと推定される「妹への手紙②」には、「妹よ、国境ほど私を惹くものはない/局部的 中国の現状にも腹を立てている。そして、国境の一方の視点に決定的に身を移すことによってジレンマを解消

判所で死か国外追放の選択を迫られ、後者を選び、主人公とヒロインは結ばれる。 彼女を処刑すべき場面で、同志たちの目を欺き逃がす。最終的に、フェオドルたちに捕らえられた許嫁は、 反乱鎮圧の命を負った白軍近衛士官の許嫁ディミトリがいる。美しく優しいヴェラに一目惚れしたフェオドル というこの映画(Volga Boatman)が、ロシア革命初期の内戦を背景とした恋愛映画だからである。主人公のフェ オドル青年は、ヴォルガ河の船人であるとともに、反乱する民衆側のリーダー。ヒロインの公爵令嬢ヴェラには、 つたら見るといゝ」と妹寧声に薦めていることがいっそう意義深くなる。ハリウッドのセシル・B・デミルが一九 一六年に監督し、 そう解釈すると、士官学校の冬休みに見た「ヴオルガ・ボートマン」を、「いゝ写真だった!/お前も機会があ 国民党と共産党の闘いや、中国と日本の闘いに重ねつつ、複雑な思いで見たはずである。 一九二七年十月に「ヴォルガの船唄」という邦題で封切られ、公開後に検閲による削除を受けた 黄瀛は映画の中の白軍 革命裁

性そのものが、 ところで、さきほどからすでに私たちは〈言語の境界〉という問題に足を踏み入れている。「ここに方言、 本人と中国人の友人を増やしていくことで、 日本人からも中国人からも理解されがたい彼の孤独をかたちづくっているのだから。 彼の孤独が癒されることはあるまい。彼を媒介者たらしめる境界 (14)

213 また些と酸つぱく、 に郷土の倍音、/一瞬に消える影、二度と思ひ出せぬ匂、 ベースとなる日本語のなかに、中国語、 と木下杢太郎が評しているように、黄の詩は非常に多言語的である。 言語 韻律の微かな網に捉へられて居る」(「詩集「瑞枝」の序に代へて「作者黄瀛君に呈する)。 英語、ドイツ語、フランス語などが頻繁に導入され、 /それが此邦の人より鋭く、/深く、柔らかく、痒く、 さらに中国

ことを証していよう。 IV 引用した「享利飯店にて」「南から来たお客の詩」、英語の俗謡をアルファベットで引用した「氷雨の夜」、モンゴ 等の姿をとり、書字上の複雑さや多様さ、表記のにぎやかなヴァリエーションと重なりあう。中国語の歌を漢文で 本語に関しては、様々な方言や俗語も援用される。こうした多言語性は、漢字、カタカナ、ルビ、アルファベット |の題名や俳優名が、カタカナやアルファベットで引用され、国境を越えた情動的コミュニケーションの記号とな 語の古歌を語釈なくカタカナで引用した「nocturne」といった大胆な例も存在する。アメリカやフランスの映 多言語性は、黄のエキゾチシズムが表面的なものでなく、詩の肉体にまで浸透する本質的要素であったという 語と日

である。国際都市における諸言語の聴取は、 詩人が愛した背島や天津とは、まさに西洋と東洋の諸言語が飛び交い、多種多様な文字表記が街頭に氾濫する巷 〈耳の記憶〉であったに違いない。 屋外からの音声や夜の音声の聴取とともに、黄瀛文学の潜在的な基層

触を通して自らの表情を積極的に変容させていると思われることである。 し、むしろ外国人であることが有益に作用したと推定している。 文学における多言語性という次元でとりわけ貴重な点は、 黄縅においては、 萩原朔太郎はその語韻上の音楽性を評価 日本語そのものが、 他 の言語との 接

君が表現に卓抜な天凛をもつてることは、 その語韻上の音楽的天凛に始めて気付いた。君は実に音楽的な好い耳を持つてゐる詩人だ。 以前からも認めてゐたが、今度の支那景物詩「喫茶店金水」をよ

212

人には見られなかった新鮮な言葉の行使であった。黄君が詩を書くときの言葉の異常な屈折はちょっとまねができ

な日本語使用に魅せられていたことをこう述懐している ――「黄君の詩の魅力は、私にとっては、

同時代の他の詩

銅鑼」同人だったアナーキスト詩人・小野十三郎は、晩年、黄との文学的方向性の違いを断りながらも、

フネフネといはれた夏の夜は

あの日本租界の富貴胡同近くで

よりも、遥かに音楽的の語韻を強く感じてゐる。黄君が日本語に好い耳を有してゐるのも、思ふに恐らく彼が 非常に鋭敏な耳を有するものだ。たとへば日本人は、フランス語や英語に対して、それらの国民自身が感ずる 節奏的美観に神経の過敏なことがはつきりわかる。/(中略) いつたい外国人といふものは、他国語に対して よく利いてるか。それから三行目で「よく」と言ふべき所を故意に「ようく」と言つてるのを見ても、 といふ書き出しを読んでも。すぐにそれがわかる。「フネフネ」といふ語の鼻音的な発韻が、 ようくアイスクリームやソーダ水をすずつたものです。

かに美的

語調の

(「日本詩人九月号月旦」、「日本詩人」一九二五年十一月号)

外国人(支那人)のためであるだろう。

学ぶ外国人一般のそれに還元する単純化など、突っ込みどころはあるが、黄の詩の音楽性を彼の外国人性と関連づ ているのか「どうしてもわからなかつた」という、植民地都市的な〈耳の記憶〉に基づき、その「フネフネ」(そ 味深い。というのも、この詩は、天津の日本租界で車夫たちが投げかけた「フネフネ」という語音が、何を意味し けて具体的に語った同時代評として貴重であるばかりでなく、「喫茶店金水」を引いている点が私たちにとって興 れにしても何だろう)を印象的なリフレーンとして記したものにほかならないからだ。 本人がフランス語や英語に対して非常に詩的な耳をもっているとする断言や、黄と日本語の関係を、 日本語を

スである。例えば

(16)

的にはまちがってないが通常は言わないぎこちない構文が、かえって表現としての強度をもたらしているというケー いる音韻やリズムよりも、むしろ語法やシンタックスの特異性を語っていると解釈したい。思いあたるのは、文法 な屈折」というのが具体的に何を指すのか小野の短いエッセイからははっきりしないが、杢太郎や朔太郎が触れて ないもので、私はそこに強く牽かれていたのである」(「黄君の日本語」)。「新鮮な言葉の行使」とか「言葉の異常

そして雪は恐らく今日も一つの風物として自分の愛望にすぎなかつた!夕方近い君の世界にも、僕の考へてる世界にももうすぐ灯が入る自分の貌が君の心中にないのは勿論のこと今はもう君に自分ははつきり見えまい?

(「点火時の前」)

オレをめぐつてふりかへるをすら出来ない……夜が明ければあの胸にくる青葉の匂ひはオレは君を知らない人にする

(「夏の白い小さな花よ!」)

かもしれない。 しているが、こうした屈折は黄嶽詩の特色のひとつに挙げられるだろう。杢太郎のいう「些と酸つぱく」とはこれ 以上二例とも生硬な翻訳調の構文が、詩人と二人称の女性との距離の問題と相関することで積極的な意義を獲得

フランスの哲学者ジル・ドゥルーズとフェリックス・ガタリは、外国語との政治的緊張をはらんだ関係から生ま

れるエクリチュールにいちはやく注目し、その機微を見事に定式化していた。

してスタイルは言語となる。こんなふうにして言語は強度的となり、価値や強度の純粋な連続体になるのだ。 く、唯一の同じ国語において、私生児であり、混血児であるが、人種としては純粋であるというふうに。こう おいてどもること。二国語あるいは多国語を用いるものであること、しかも地方語、あるいは方言とは関係な ある。外国人であること、しかし、単に自国語ではない言語を話す誰かのようにではなく、自分自身の言語に ることと同じなのだが、単にパロールにおいてどもるばかりではなく、ラングにおいてどもることによってで スイス人たろうとする。(中略)プルーストは言っていた。「傑作はある種の外国語で書かれる。」それはども 語で書き、アイルランド人ベケットは英語とフランス語の両方で書き、リュカはルーマニア出身、ゴダールは 多かれ少なかれ、ある種の二言語併用の状況にあったことに気づく。チェコのユダヤ人であるカフカはドイツ -われはカフカ、ベケット、ゲラシム・リュカ、ジャン=リュック・ゴダールを繰り返し引用する。

(ジル・ドゥルーズ、フェリックス・ガタリ『千のプラトー』)

彼の中国語会話も相当奇妙なもので、標準中国語、四川方言、日本語がチャンポンになっていたという。しかしな がら、彼は日本語で詩を書くことによって、言語と自己との不安定で偏倚した関係をスタンダードなものへと修正 草野心平ほか数人の友人たちが書き残している。また、四川外語学院で彼から日本語を教わった宋再新によれば、 日本語への抵抗と表裏一体であるといえる。そして諸外国語や方言が詩を損なうことなく詩のなかで共存している まれ変わっている。だから、彼の日本語への愛はナショナリズムにつながるどころか、メジャーでスタンダードな おける吃音を、 しようとするよりも、それを特異な表現力をもったスタイルへ転化することに努めたのだ。彼は自分のパロールに 一言語併用者・黄瀛の文学を考えるうえで、非常に示唆的である。 詩のなかで再現してはいない。吃音は文体の次元へ超越し、日本語の強度的使用としてすっかり生 彼が日本語を話すときどもったということを、 のだ

する〈友愛の言語〉たりえるからなのだろう。別の言い方をすれば、

彼の詩は、

搾取や差別や陰謀に満ちた植民地

異言語どうしを媒介

境界上でマイナー化した孤独な「自分自身の言語」こそが、異言語を排除せず歓待し、

テ ィーを選択したという宣言に聞こえないだろうか。詩の配列が制作年順にはなっていない詩集のラストにこの詩

伝書鳩を飛ばす技を意味する。詩の多言語性自体が書簡性を含んでいるのだ。 引に受けることを通じて、詩の本質に触れた詩人である。彼にとって詩を書くことは、日本語と中国語のあいだに いだに、曲折した小径や、密かな地下道、空路や海路のようなものを発見する者。それが詩人の定義であるとすれ 都市に潜んでいた〈ユートピア的なもの〉を救っているともいえる。 通常の意味伝達のための言葉、すなわち皆が行く公道のような言葉に満足せず、 黄瀛は、中国人であるともに日本人でもあるという出自の資任をとり、境界に引き裂かれた我が身を積極的に 無関係に見える言葉どうしのあ

逃れて、伝統的で民衆的な中国人街である天津路に入り、少年は安堵感を覚える。「天津路」という地名には、 だろうか。「きうくつな学校」すなわち背島日本中学校から逃れ、さらにドイツ的な「バタくさい」町並みからも と妹が暮らす天津への思いが込められているかもしれない。そのささやかな料亭に入った詩人は、この詩をこう結 では、『瑞枝』の巻末に置かれた詩「天津路的夜景 ―― 背島回想詩 ――」を、 私たちはどう受け止めれ ば よい 母 の

あの東洋的な天津路の夕景を ぱいの脚茶に

ぐつと心の中にのみいれて

自分は中国人だといふことを無上の光栄に思ふた

(18) これは、多文化性から逃れ、 自身の二重のアイデンティティーにけりをつけ、 中国人としての単一なアイデンティ

?があるのだから、余計そう考えたくなる。詩のタイトル中の「的」の用法も中国的である。しかも「光栄に思ふ

することもできないとくる。 であることは、この名前から一目瞭然だ。しかも、一般の日本人は、「瀛」の字を読むことも、書くことも、 のアイデンティティーを問い返す問いでもあったに違いない。日本語でいかに勝れた詩を書こうとも、 いう名前は、彼にとってイメージの発想源であったばかりでなく、絶えず身につきまとう厄介な問題、詩人として つぶつてゐる」で締めくくられる「八月の夜」は、まさに「黄瀛」の名前を暗号化した作品といえる。「黄瀛」と ならない。「森がくれて海となる/海の中の一人となる」という詩行からはじまり、「きいろい壁の前でオレは眼を おしく自己を取り囲む壁の色とされている。『瑞枝』の表紙、背表紙、裏表紙に見られる波状の黄土色の文様は、 高貴な色であり、黄土地の色、ほとんど中国自体を象徴する色である。けれども、これらの詩においては、うっと とか、「もう、星天ときいろい壁の絵は見飽きた!」(「N.N.から N.N.へ」)いうかたちで。中国文化におい この名前をモチーフにしたと思われる詩行が存在する。「きいろい壁の前でオレは眼をつぶつてゐる」(「八月の夜」) た」の「光栄」には、「黄瀛」という名前が埋め込まれていると思われる。 "黄瀛」の字義である「黄色い海」を麦象していよう。海、黄海、シナ海はしばしば作中に登場するトポスにほか 黄瀛は自分の名に特別なこだわりを抱いていたに違いない。『瑞枝』の詩中に「黄瀛」の文字は登場しない 彼は自分の詩に署名するつど、なぜ日本語で書くのかという根本的な問いに直面 彼が中国人

から贈与された場合に受け手が感ずる感情である。とすれば「中国人だといふことを光栄に思ふた」のは、 を光栄に思ふた」となっている点もニュアンスに富んでいる。「光栄」の思いとは、 から一寸借用した」(「後記」)ものである。「中国人だといふことを誇りに思ふた」でなく、「中国人だとい ではなく、特定の過去のそれであることを明示している。「瑞枝」という書名は、日本の詩歌の原点である「万葉 留保を加える表現的特徴を複数指摘することができるのだ。「青島回想詩」という副題は、この感慨が現在のそれ しかし、天津路の一杯の繭茶に味わった中国人たる喜びがまったく真実なものであったとしても、 褒美や評価を他の上位の存在 その特権化に 自分が

るをえない立場にあったはずである。

(20)

207 国のあいだの境界的アンデンティティーを保ちつつ自分は激動の中国で生きる、という困難な決意の密かな表明と この詩が中国語訳されたら「光栄」と「黄瀛」をつなぐ小径は消えてしまう。黄瀛の境界的アイデンティティーと となる「黄瀛」と重なるのは、あくまで日本語における音読みにおいてであるという点に注意しなくてはならない。 して読む。 は、「コウエイ/フアンイン」の境界が彼の一身に刻印されているあり方に相当する。 完全には中国人ではないからだろう。また、中国音で「グワンロン」となる「光栄」が、中国音では「ファンイン」 結局私は、「自分は中国人だといふことを無上の光栄に思ふた」が詩集全体の結句に選ばれたことを、

四 宮沢賢治とのリスポンス

けで、花巻温泉へ行ったのがこの年の春だったということまでは語っていない。そんな懸念を抱いていた私は、 しかし、この文は、卒業旅行で花巻温泉に寄るという情報を黄が知ったのが一九二九年の春であると語っているだ は随分よろこんだ。(中略)私を惹いたものは宮沢野治君の存在だつた」という文が典拠となっているのだろう。 で臥せっていた宮沢賢治を訪ねたのは、これまで一九二九(昭和四)年の春といわれている。おそらく、 来たのは県外では秋田の土崎、 九年七月号の「温泉たより/往来」という見出しの記事中に、「本年は修学旅行団の来泉が非常に多くなり六月に ブ温泉学』のなかで書いた。「花巻温泉ニュース」(花巻温泉株式会社が戦前出していた月刊タブロイド紙)一九二 巻温泉について調べていて、黄の来花時期の修正を迫る決定的資料に気がつき、そのことを二○○八年『イーハトー 追悼文「南京から」(『宮沢賢治追悼』一九三四年)の冒頭「一九二九年の春、学校の卒業旅行が発表された時、 - 東京陸軍士官学校」とのあいだに読点が打たれているが、「支那留学生」というのは士官学校の中国人留学生を指 陸軍士官学校による北海道への卒業旅行の帰路、 亀田、 旭北、池月、鷹巣各小学校、東京陸軍士官学校、支那留学生」とあるのだ。 宿泊のために立ち寄った花巻温泉から黄癜が、 結核により自宅

206

名は とは間違いない。これは当時の士官学校の卒業が七月だったこととも整合する。(⑤) しているはずである。翌年の七月号には「陸軍士官学校中華民国留学生は昨年も来泉したが本年卒業すべき八十六 (中略)五月二十九日花巻温泉に一泊した」とある。黄癜が宮沢賢治を訪ねたのが、 一九二九年六月だったこ

『春と修羅』を自費出版した賢治より、戦前は遥かに有名だった。 ていたことを暗に語っていよう。ちなみに一九二五年に「日本詩人」新人第一席に選ばれた詩人は、一九二四年に 訪ねたのは、もちろんその文学を高く評価していたからである。他方、賢治の歓待は、賢治もまた黄の詩を評価 も」話したらしい。詩よりも宗教が主な話題となったそうだが、黄がわざわざ区隊長から特別許可をとって賢治を 非とほせといふから」面会できた。五分を過ぎ、黄が辞去しようとすると、賢治が何度も引き止め、 南京から」によれば、賢治の父宮沢政次郎から面会は五分だけといわれたので帰ろうとしたところ、「本人が是 結局「半時間

たって、足早やに黄瀛と宮沢賢治の比較を試み、彼らの文学的交流を想像してみたい。 誌上で黄の詩は、「心象スケッチ」と冠された賢治の詩としばしば隣り合って掲載されている。本稿を閉ざすにあ 黄は詩集『春と修羅』(一九二四年)を早い時期に読み、感銘を受けていたという。また興味深いことに、 「銅鑼

九年十一月号)には「宮沢賢治の病気も全快してくれゝばいゝが」という詩句が記されている。 彼は賢治の影響を受け、それを公示さえしていたのだ。賢治との面会後に書かれた「春さきの風」(「詩神」一九二 「心象」「心象スケツチ」という賢治的語彙が記されている。ずばり「心象スケッチ」というタイトルの詩もあれば、 「詩と詩論」第四冊(一九二九年)に、彼が賢治のように四篇の詩を「心象スケッチ」と冠して発表した例もある。 「窓を打つ氷雨」「ある夜の心象」「やろんぼうの唄」「作品八十三番」「ここまで来た時」などの黄の詩篇中には、

る」という詩行は、黄が詩を書くに先立って、外界と内界の動きをリアルタイムで連続的にノートしたこと、方法 論のうえでも賢治に倣ったことを明かしている。 れを記述しているという点で、賢治のそれに類似している。「ここまで来た時/五十八頁の心象スケッチが停止す 確かに黄の心象スケッチには、眼前の風景を、時間を追ってたどりながら、同時に風景をたどる自己の意識 の流

まり、

詩人黄瀛の光栄 205 賢治が日本における日本語で書かれた〈クレオール文学〉の特質を探求する上で最も重要な作家のひとりであるこ 言語とし、標準日本語で書いた賢治には、二言語併用者としての相貌がある。彼は差別される東北弁に関する問題 経験がないが、彼は海外に憧れ、洋書を読み漁り、コスモポリタン的な思想を抱いていた。また、東北弁を生活 キゾチックな文学的効果を発揮する。賢治には、日本領になっていたサハリンへの旅行を別にすると、 岩手の方言などが頻出する。科学用語や仏教用語も多く、それらは彼の科学的知識や信仰を示すばかりでなく、エ かび上がらせることに努めておきたい。先に言ってしまえば、それはまさに「書簡性と多言語性」である。 がおかれている。また賢治の自然がはらんでいる宗教性や宇宙論が、黄の人間主義的・叙情的な自然にはな 特質があるのに対して、黄がいう心象スケッチは、より一時的・静的・絵画的であり、叙情詩としての結構に重き 賢治文学の書簡性も異論の余地がない。「賢治文学は、ほとんど〈通信することの夢〉の変奏であった」 周知のように賢治の詩には、英語、ドイツ語、サンスクリット、エスペラント風の造語、外国語なまりの日本 ただし、私はここでは彼らの差異を際立たせるよりも、彼らの相互理解と交流を促しただろう基本的共通性を浮 ッチが、精神の質的な変動を、 けれども、差異も目立つ。そもそも詩「ここまで来た時」は、 おそらく異論の余地がない」(西成彦「クレオール」、天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』)。 心象スケッチの流れがふいに途絶えてしまったあとの空虚な心境の方を主題とした詩である。 中央政権から植民地化された東北に関する問題意識を作中に書き込み、エスペラントに接近した。「宮沢 変化する風景や身体の移動との相関において、連続的・重層的に描出するという 五十八頁も記したノート自体を作品化した詩では 賢治の心象ス 外国旅行

(22) した妹トシからの この角度から黄瀛の書簡体詩「妹への手紙(1)」「妹への手紙(2)」を改めて取り上げよう。 称の呼びかけや名前が記されている。 「通信」 を問題とした詩 「青森挽歌」もある。 大半の詩には日付がつけられ、 賢治の しばしば親密な二 「永訣の朝」を再

「郵便・通信」、天沢退二郎編前掲書)。詩集『春と修羅』は、詩人を「郵便脚人」に喩えた詩「屈折率」ではじ 童話集『注文の多い料理店』は、馬車別当が代筆した山猫の手紙(「どんぐりと山猫」)からはじまる。

(髙橋世

んのゆき」を語り、後者は天津の妹から贈られた「毛糸の股引とキツスリンのお菓子」と妹に贈る「銀の燭台と私 前者は詩人が妹に「おまへ」と、後者は詩人が妹に「お前」と呼びかける。前者は詩人が瀕死の妹に贈る「ふたわ お前の兄より」という後付が記された「妹への手紙⑴」は掲載されている。トーンは正反対なほど異なるとはいえ、 した「銅鑼」第九号(一九二六年十一月)誌上に、「十一月二十三日。火曜の晩/天津南開大学

の写真」を語る。黄瀛と宮沢賢治の接点として、妹コンプレックスを語ることもできる。

る声の親密さを封印したかったためと考えられる。「けんじや」に「賢治」が暗号化されているとする解釈もある。 ひとり往きます)についてもいえる。 同様のことは、「永訣の朝」のなかの妹のもう一つの方言発言の表記「(Ora Orade Shitori cgumo)」(私は私で 取って来てください」と標準語訳せず、しかもひらがなだけで表記したのと同じように、妹と自分のあいだにおけ ルファベットで綴ったのは、賢治が「あめゆじゆとてちてけんじや」という方言による妹トシの発言を、「雨雪を 対して用いる)のことだろう。日本の一般的読者への円滑な意味伝達も、漢字の字而もあえて無視してこの語をア Iren!」というリフレーンが記されている。「Iren」は、「伊人」(「あの人」を意味する中国語で、もっぱら女性に ·妹への手紙(2)」には、「永訣の朝」の有名なリフレーン「あめゆじゆとてちてけんじや」を想起させる

能な渾名、隠語、合言葉のようなものなのだろうか。 して、差し出し人である兄の名「宇比雄」は、日本人名としても中国人名としても不自然である。 いる。「ネイセイ」と読むよりも「ニンシン」と中国音で読むべきなのかもしれない。妹の名が実名であるのに対いる。「ネイセイ」と読むよりも「ニンシン」と中国音で読むべきなのかもしれない。妹の名が実名であるのに対 「妹への手紙②」の末尾には、「私の一人の妹 寧声!/お兄の一人の兄 宇比雄」という宛名と署名が記されて 妹にのみ理解可

とあて名を書いておりました。封筒の文字ばかりではなく、中身の手紙の文字も大きくて、芸術的で、日本人の文 ちゃんと一点一画も間違わず書く人は、二、三人しかいませんが、宮沢賢治さんは封筒いっぱいに大きく、チャン 点から証言している。第一は「銅鑼」同人だった森荘巳池が黄から聞いたという間接的証言 黄嶽と宮沢賢治のあいだの書簡は、残念ながら未発見である。けれども、文通があったことを、 黄は彼らし

(24)

字と思われないよい文字だと、みんなで言っていましたよ」(『ふれあいの人々 接的証言 ――「後に宮沢から一度手紙をもらいましたが、丁寧な口調で、宛名も間違いなく私の名前を書いてくれ ました」(「いよよ弥栄ゆる宮沢賢治」)。書簡的エクリチュールの詩人どうしならではのコミュニケーションを語る 段坂の黄嶽宅に下宿していた中国人留学生たちだろう。もうひとつは、 一九九六年に来日した黄の讃演における直 宮澤賢治』)。「みんな」とは、

学のなかには刻まれていないのか。 黄瀛は宮沢賢治が会った数少ない中央の有名詩人であり、 唯一の中国文人である。 黄との交流の痕跡は、 賢治文 逸話というべきである。

聞録」原稿の推敲異文には、副司会者 ――「親交があつた」 おかげで語り手が大会全体を見聞できたというキー 聞録」では外国人たちが花巻温泉に宿泊してベジタリアンの大会を開くことになり、偶然同温泉に宿泊した地 作しかけて、結局中断したものである。「ビヂテリアン大祭」では、日本人の語り手を含む各国のベジタリアンが の直前という含意があるようだ。しかも、「ビヂテリアン大祭」に登場する中国人は「陳」だったのに、「~大会見 泊があった可能性が高いと私は見る。一九三一年九月四日という大会開催日は、満州事変(同年九月十八日勃発 する駐日本各国武官の花巻温泉宿泊(一九二八年)などの他に、 北米大西洋沿岸のニュウファウンドランド島(ニューファンドランド島)に集って大祭を開催するが、「~大会見 という童話を、 ムがまるごと潜在しているではないか。 ソン ―― として「洪丁基」という中国人名が記されている。「洪丁基」(KO TE/KI)のうちには、 人物がそれを見聞するという設定に変えられている。この新設定のモデルとして、岩手県下陸軍特別大演習を参観 「一九三一年度極東ビヂテリアン大会見聞録」というテクストは、 病床をたたんだ賢治が東北砕石工場技師として石灰抹肥料の訪問販売をはじめた一九三一年頃、 黄瀛ら陸軍士官学校中華民国留学生の花巻温泉宿 一九二三年頃書かれた「ビヂテリアン大祭 黄瀛のフルネ

たとして伝えている(『ずっぱり岩手(新版) 賢治が黄瀛と面会した際、「お会いできて光栄です」と駄洒落をいったという逸話を、佐藤竜一は黄本人から聞 岩手さはまるキーワード事典』の「黄癜」の項)。「自分は中国人

『瑞枝』の刊行を願う言葉や賢治を懐かしむ言葉を含む随筆「日本東京」に、「この文をかき終つた時、宮沢賢治君 をもっていたのかもしれない。賢治の命日は一九三三年九月二十一日。製本に予想以上の時間を要したせいで、 『瑞枝』の刊行は、賢治の死の翌年の一九三四年五月になってしまったが、当初の広告された出版予定は、黄瀛の だといふことを無上の光栄に思ふた」という詩句は、この賢治のジョークに対する、私的なリスポンスという側面 '後記」の日付でもある一九三二年五月だった。黄は賢治が『瑞枝』を読むと思って編纂したはずである。 それが、

の逝去の報に接した」という追記を加えるはめになったのである。

この中には何でも入っていますよ。どうか題をご覧ください(笑い)。題から皆さんの考えを、 沢賢治」とは、賢治の生前に応えそこねた賢治のジョークに対し、六十七年のスパンスを通したリスポンスだった 「いよいよ宮沢賢治が世界中に知れ渡る」という言祝ぎ、予祝の意味に劣らず、IYOYO-IYA-YURU-MIYA といっ 題した諃演をした。当時、私はその東京講演(先ほどの引用はこちらからである)を聴いたのだが、タイトルにい ください。 のかもしれない。黄は東京讇演の最後に語っていた ――「私の話は尻切れとんぼで、「いよよ弥栄ゆる宮沢賢治」。 ちばん驚いてしまった記憶がある。「弥栄主義」の残響を聴いたからではない、このタイトルがすでに詩だからだ。 た音韻の吃音的反復が祝祭的である。そして「光栄」に通じる「栄」という文字の存在……。「いよよ弥栄ゆる宮 九九六年八月、宮沢賢治生誕百年祭に黄瀛は招待されて来日し、花巻と東京で「いよよ弥栄ゆる宮沢賢治」と それでは終わりにします」。 その題から話して

本稿は、このとき黄瀛から科せられたお題に対する私のリスポンスにほかならない。

際シンポジウム「詩人黄嬴と多文化間アイデンティティー」が開催された。本稿は、 二〇〇八年九月二十五日―二十六日、四川外語学院で、同学院東方語学院と同学院日本学研究所の主催 - ― 宮沢賢治とのレスポンス」「宮沢賢治と花巻温泉」を骨子とした論文である。他の発表者は、 その際の筆者の二本の発表 による国 王敏

(26)

というのだ。

3

言い添えておく。

大塚常樹、

勝又浩、

川村湊、

小池陽、

黄育紅、宋再新、

張暁寧、

辻井喬、

楊偉。

諸氏の発表に刺戟を受けたことを

付記2

黄瀛のバイオグラフィーに関しては、主に佐藤竜一『黄瀛 小関和弘「黄瀛」『現代詩大事典』を参照にした。 その詩と数奇な生涯』、 王敏「黄瀛」『宮沢賢治大事

- î 黄瀛との交友を回想する木山敏平の私小説「第三国人」を参照されたい。
- 2 る。エキゾチシズムを抑制したのかもしれないが、黄瀛の詩においてある種の漢語をどう発音すべきかという問題が残る。 **「朝の展望」や「喫茶店金水」に見られるエキソチックなルビは、これらの詩が『瑞枝』に収録される際に削除されてい**
- 正しくは「云はれた」「すゝつた」。
- 4 八年九月二十五日の口頭発表。 宋再新「黄瀛先生に聞き忘れたこと」、国際シンポジウム「詩人黄瀛と多文化間アイデンティティー」における二〇〇
- 5 『イーハトーブ温泉学』一四六頁。
- 6 『陸軍士官学校』(第三版)、五〇頁。
- 7 集」が掲載されたのは、「日本詩人」一九二四年十二月号である。 と修羅」批評以前に私は彼を知つてる」とある。一九二四年四月に刊行された『春と修羅』に対する賞賛「十三年度の詩 「南京から」に「詩人としての交渉は雑誌「銅鑼」で彼と伍したが、もつと古く云へば日本詩人で佐藤惣之助氏が「春
- 8 黄瀛の自筆校正入りの『瑞枝』を所蔵している勝又浩氏からの教示によれば、黄は「お前の一人の兄」と直している。
- 9 の役目を果たした。森は黄の名前をめぐるもう一つのエピソードを『ふれあいの人々』宮澤賢治』に書き残している。 |黄」を中国式には「ホワン」と読むと草野心平から教えられ驚いた森は、岩手に戻ったおり、賢治にそのことを話した 森は一時期九段に住んでおり、近所にいた黄瀛と頻繁に交友し、賢治と黄瀛のあいだをとりもつメッセンジャーボーイ

黄瀛『瑞枝』復刻版、蒼土舎、一九八二年 参照文献(黄瀛の詩が掲載された雑誌については省略)

黄瀛『景星』旧村栄発行、一九三〇年

奥野信太郎「詩人黄灝のこと」『日時計のある風景』文芸春秋社、一九四七年 佐藤竜一『黄瀬』その詩と数奇な生涯』日本地域社会研究所、一九九四年

ジル・ドゥルーズ/フェリックス・ガタリ『千のプラトー』(宇野邦一他訳)河出書房新社、 小野十三郎「黄君の日本語」『詩人黄瀛』回想篇・研究篇』蒼土舎、一九八二年 萩原朔太郎「日本詩人九月号月旦」『萩原朔太郎全集』第八巻、筑摩書房、一九七六年

一九九四年

岡村民夫『イーハトーブ温泉学』みすず書房、二〇〇八年 黄旟「南京から」、草野心平編『宮沢賢治追悼』次郎社、一九三五年

山崎正男设任編集『陸軍士官学校』(第三版)秋元書房、一九七三年

西成彦「クレオール」、天沢退二郎編『宮沢賢治ハンドブック』新書館、一九九六年 |花巻温泉ニュース」一九二九年七月号、一九三〇年七月号、花巻温泉株式会社

高橋世織「郵便・通信」、天沢退二郎編、

森荘巳池『ふれあいの人々 宮澤賢治』熊谷印刷出版部、一九八八年

黄瀛「いよよ弥栄ゆる宮沢賢治」『世界に拡がる宮沢賢治 センター、一九九七年 宮沢賢治国際研究大会記録集』vol. 1 宮沢賢治学会イーハトーブ

宮沢賢治『新校本宮澤賢治全集』第十巻、筑摩書房、一九九五年

黄瀛「日本東京」「詩人時代」第三巻第十二号、一九三三年十二月一日、『新校本宮澤賢治全集』第十六巻(下)、筑摩書房、 佐藤竜一他『ずっぱり岩手(新版) 岩手さはまるキーワード事典』熊谷印刷出版部、二〇〇七年

二〇〇一年

安藤元雄他監修『現代詩大事典』三省堂、二〇〇八年 渡部芳紀編『宮沢贤治大事典』勉誠社、二〇〇七年

(表象文化論・国際文化学部教授)